

映画「霸王別姫」についての考察

平成 20 年 1 月 11 日

河野 愛一郎

1 映画の簡単な概要

中国伝統文化の一つである京劇役者の蝶衣と小樓のふたりが、『霸王別姫』を演じながら、軍閥抗争、北伐、日中戦争、国共内戦、文化大革命といった現代中国の激動の時代の中で、翻弄されていく。

2 京劇の歴史

映画を見ていて、京劇が一部の中国の地方だけで流行っているのかと思わせるところがあったので、まず、この映画のテーマでもある京劇自体について調

べたことをまとめる。

京劇が中国伝統文化と呼ばれるが、この歴史はそう古くないようだ。現在の形の京劇が確定したのは、中国最後の王朝である清の6代目皇帝の乾隆帝の頃である。つまり、彼の治世は主に18世紀後半であり、今から200年前のことに過ぎない。日本の歌舞伎も同じ頃の江戸自体に成立したので、これと時期的に相当しているといえるだろう。

発祥地は、中国中部の長江北岸の安徽省だが、当時の清の首都である北京を中心に発達した。そこで、現在の名称である「京劇」が定着したといわれる。映画の後半でも出てくるが、文化大革命では他の伝統文化とともに京劇も糾弾の対象となって停滞してしまった。しかし、共産党政府の方針転換により、現在では国の重要な文化として保護されている。

3 京劇『霸王別姫』の背景となった歴史

京劇役者の蝶衣と小樓が主に演じていた京劇『霸王別姫』、中国古代史の漢王朝が前夜の、項羽と劉邦の争いの話である。本項では、この歴史をまとめたい。

時代は紀元前3世紀である。始皇帝が史上初めて中国統一を成し遂げた秦王朝は、彼の死後急速に頻発した反乱により滅亡した。秦王朝打倒に功があった劉邦と項羽は、復活した楚¹の君主の下で覇権を争うことになった。農民出身の劉邦は項羽と妥協し²地方に退くも、貴族の家柄の項羽が楚王を暗殺し自ら楚王と名乗ると、項羽に対し挙兵した。当初、項羽の軍の方が、資金面・兵数面で、劉邦を圧倒したが、各地での蛮行の結果、人民たちの指示や部下たちの支持を失っていった。

そこで、項羽は劉邦と和解することにした。和解し両者撤退することになった。しかし、劉邦の部下の韓信³が、鴻門の会で劉邦を殺し損ねた項羽が後悔している念頭に、ここで項羽を討ち取らないと劉邦が後悔すると指摘し、劉邦の

¹ 春秋の五覇、戦国の七雄で有名な江南の楚は、秦による中国統一の仮定の中で滅ぼされていた。

² この妥協の際の両者の会談を「鴻門の会」という。この際、項羽は劉邦の暗殺を目論んだが、劉邦の部下の機転により阻止された。このことを後に項羽は後悔することになる。

³ 「韓信の股ぐり」の韓信である。

軍は背後から項羽の軍を襲うことを決意した。結果、項羽の軍は敗走し、垓下の砦に追い詰められた。

ここからが映画での京劇で出てくるシーンである。小樓が演じているのが楚王である項羽であり、蝶頃が演じるのはその妻である虞美人である。項羽の軍は劉邦の軍に四方八方と包囲されたが、しばらくすると項羽の出身地である楚の歌が、周囲から聞こえてきた。つまり、同じく楚出身の項羽の兵隊が投降し、劉邦の陣営から歌っているのである。この状況から生まれたのが、有名な故事成語である「四面楚歌」である。この瞬間、項羽は自分の勝利を絶望し、死ぬ覚悟で最後の戦いに乗り出そうとした。そこで、項羽の妃である虞美人は自分も共に行くと希望したが、項羽は虞美人に行き続けろといった。しかし、それに反して虞美人⁴はその項羽のそばで、自刃した。項羽も、そのあと最後まで戦い抜き自害した。

戦いに勝利した劉邦は帝位に就き、漢王朝400年の礎を築くことになる。

4 映画上の中国現代史

映画はまだ軍閥が中国を統治している中華民国時代の1924年から始まる。1912年に清王朝が滅亡してから12年後のことだ。中国大陸の至るところに軍閥が割拠し、国内は大いに混乱していた。また、映画の舞台となる北京は、当時、北京とはいわず、北平と呼んでいた。軍閥当地下では税金が重く、悪政が横行していた。というわけで、蝶衣の母親の生活が苦しかったのもこのせいではなかろうか。この頃の文化の状況であるが、北京大学を拠点に陳独秀・魯迅・胡適などを中心に現代中国の文学革命が始まった。これは、それまで書き言葉中心だった中国文学に話し言葉である白話文学を導入するものである。しかし、映画でも見られるように、もともとの伝統文化も盛んであったようだ。

このころ中国国民党と中国共産党はすでに存在していたが、24年に軍閥打倒を目標にして第1次国共合作が結成された。翌年、中国革命の父、孫文が病死したが、26年には第1次国共合作による北伐が開始され、軍閥は打倒されていった。しかし、27年に国民党が共産党員を虐殺する上海クーデターが発

⁴ その後、虞美人は自殺した垓下で葬られた。すると墓には赤いケシの花が咲いた。赤いケシの花を「虞美人草」というのはこのためである。

生し、第1次国共合作は崩壊した。国民党の国民革命軍によって北伐は継続され、28年には北京政府を担っていた最後の軍閥である張作霖を追い出し⁵、国民党が全国を統一した。以後、49年まで、中国の首都は南京である⁶。この国民党の北京入城は映画では描かれず、この間に蝶衣と小樓は売れっ子の京劇俳優となっている。対して、共産党は井崗山の瑞金に立てこもり、中華ソビエト共和国を建国して、国民党に抵抗した。

31年、柳条湖事件により満州事変が勃発して、日本軍は中国東北部である満州を制圧し、北京のすぐ傍まで日本軍が迫ることになった。しかし、売れっ子の京劇俳優である蝶衣と小樓の生活もこの頃が一番良かったように思える。34年には、共産党の拠点である瑞金が陥落し、共産党は長征を開始した。翌年、延安にたどり着いた共産党は延安政府を設立し、国民党に共産党との民族統一戦線⁷の結成を呼びかけた。これを8・1宣言という。当時の両党の指導者だが、国民党は幣制改革を期に蒋介石が、共産党は長征中の遵義会議で毛沢東が党内の独裁体制を強化した。

蒋介石は8・1宣言を拒んだが、36年、延安攻略を担当していて日本軍に爆殺された張作霖の息子である部下の張学良に監禁された。これを西安事件という。ここで、蒋介石は張学良や共産党の周恩来から説得され、第2次国共合作に合意した。翌年、盧溝橋事件が発生し、日中戦争が勃発した。国民党を中心とした第2次国共合作は抵抗するが、北京を最初に中国の沿岸部の主要な都市は全て占領される。なお、日本軍の北京入城は、映画にも出てきている。以後、第2次世界大戦の終結まで、9年間に渡って、蝶衣と小樓の住む北京は日本軍によって占領されることになる。共産党の軍隊である紅軍は、八路軍・新四軍として国民党の指揮下に組み込まれ、日本と戦った。蒋介石の国民政府が南京→武漢→重慶と奥地に逃亡したことや太平洋戦争が始まることによる物資に不足で、日本軍は中国での快進撃は続けることはできなくなった。中国戦線においては膠着状態が終戦まで続き、45年の8月に日本がポツダム宣言を受諾することで、太平洋戦争及び日中戦争が終結して、北京は再び国民党の国民党の統治下に置かれた。

⁵ 張作霖は自分の本拠地である中国東北部への逃亡中に、『張作霖爆殺事件』によって暗殺された。

⁶ 日中戦争期には、武漢や重慶が臨時首都。

⁷ 世界的には一般に、「人民戦線」と呼ばれる。これは、第3インターナショナルであるコミンテルンの指導により提案されたものである。

終戦直後、国共内戦は再開された。このころの国民党軍は非常に質が悪く⁸、各地で蛮行を繰り返した。蝶衣が投獄されたのもそのためであろう。当初は、武器の性能や兵力で勝る国民党が有利で延安占領した。しかし、腐敗する国民党から人民の心は離れてゆき、米の援助も減少し、共産党が健闘して、48年12月には共産党が北京を占領する。49年、国民党・国民政府（中華民国）は台湾へ逃亡し（台北政府へ）、10月に中華人民共和国が建国され、毛沢東が国家主席、首相は周恩来が就任した。

ブルジョワ民主主義の中華民国とは違って、中華人民共和国の新民主主義は、毛沢東の思想の一つであり、労働者、農民の同盟に基づく人民独裁を目指している。結果、共産化の過程において、封建勢力や資本家などのお金持ちは打倒された。映画で袁四爺が処刑されていることから、彼も封建勢力か資本家であったことが確認できる。また、共産党独裁によってヘゲモニー政党制となり、共産党への批判や国家の方針に反することは一切できなくなった。伝統文化は封建的とされる傾向になり、京劇も国家から軽視され、プロレタリア文学や現代文化が流行するようになる。映画の劇団員が、現代演劇をしようと提案しているのはこの影響があるのであろう。

58年、毛沢東の指導の下、第二次五カ年計画、いわゆる「大躍進政策」が始まり、人民公社の設立や農業の集団化を急速に推し進めた。結果、生産性は逆に悪化して、農作物が不足し、中国で数千万人もの餓死者が発生して、大躍進政策は失敗となった。そこで、毛沢東は失墜し、劉少奇・鄧小平が台頭し、徹底的な共産主義からの修正が目指され、自力更正の促進や市場原理の一部投入が行われた。

指導者の座から引きずり下ろされた毛沢東は、66年から10年間ほど続くプロレタリア文化大革命を引き起こした。これは劉少奇や鄧小平が推し進める資本主義や、京劇などの封建主義の文化を破壊し、新しい社会主義文化を作ることが建前である。しかし、実際には毛沢東による、劉少奇や鄧小平への権力奪還闘争である。この際、毛沢東は民衆、特に学生を先導して、彼らを紅衛兵として自らに絶対の服従を誓わせた。彼らを使って、時の政権を打倒した訳だが、改革運動をするはずが単なる国内の知識人や封建勢力への粛清となってしまう、この10年間での犠牲者は千数百万人といわれている。結果、劉少奇や鄧小平らは実権派（走資派）とされ追放されたわけだが、伝統文化であ

⁸ これは、日本から中華民国に返還された台湾に於いても同様に、国民党は2・28事件で、台湾人に対して徹底的な弾圧を行った。

る京劇も封建文化とされ、映画では、蝶衣と小樓たちも命の危険にさらされた。ちなみに、このとき、蝶衣と小樓たちに自己批判させている人民服を着た紅衛兵もほとんど若者（学生）だと確認できる。文化大革命には2期あり、まず、毛沢東と林彪による体制の時期と、林彪がクーデターを起こして失敗した後の、四人組が権力を振るった時期に分かれる。四人組とは、毛沢東の側近で、文化大革命を推し進めたメンバーである。この中には、毛沢東の夫人の江青も含まれ、彼女は現代劇の俳優なので伝統文化を好まず、京劇を目の敵にしていたとされる。確かに、映画の冒頭で、文化大革命後のシーンが出てくるが、「四人組」のせいで、京劇が見られないという一般人の話が出ていた。よって、蝶衣と小樓が糾弾されていたシーンは、林彪が失脚し、「四人組」が権力を振るい始めた71年以降と推察される。

76年、文化大革命のシンボルである毛沢東が死去した。次の指導者である華国鋒は四人組を逮捕して、文化大革命は終結した。以後、中国は経済開放路線や「4つの現代化」⁹を始め、政治的には社会主義体制維持しつつも、経済的には資本主義的市場原理¹⁰を導入し、高度経済成長を進めていくことになる。また、京劇などの中国の伝統文化も尊重されるように見直された。しかし、蝶衣の傷は癒えなかったようで、小樓との11年ぶりの再開後、自殺してしまった。

5 映画全体に関する感想や考察

日本の映画は大抵、最後は“ハッピー・エンド”である。しかし、本作はそうではなく、終わりに向かえば、向かうほど、中国の政治情勢の混乱から、蝶衣と小樓のとりまく運命は悪い方向に向かって行った。小樓の妻である菊仙は映画の後半である文化大革命時に自殺し、蝶衣に至っては映画の最後で同じく自殺している。全体的に暗い映画であり、かつ、アンハッピーに終わっている。激動の時代の中で、互いに愛し、憎しみ合う。マザーテレサの言葉で、「愛の反対は憎しみではない。無関心である。」というものがあるが、愛と憎しみは一体である。熟語の「愛憎」とは、左右のような反対の漢字を組み合わせた熟語ではなく、もしかしたら、飛翔のような同じ意味の漢字から成る言葉なのかもしれない。

⁹ 国防、工業、農業、科学技術の4つを指す。

¹⁰ 具体的には、自主経営、海外技術・資本導入、経済特区などの政策が挙げられる。

また、この映画は、文化大革命や日中戦争など現代中国の激動の時代の人々の生活や、そもそも京劇自体を知るために、いい資料といえる。また、舞台が北京とか京劇ということで、かなり絞られており、歴史的背景のない視聴者でも最後にはよく分かる中国映画ではなかろうか。

あと、疑問に思ったことだが、これは香港映画であり、俳優は北京出身者と香港出身者が混ざっているが、言語の問題はないのであろうか。映画は北京語であったが、香港の俳優は、イギリス植民地時代に英語、現地語である広東語の他に、北京語も習得するのであろうか。仕事のためならやむをえないが、少なくとも三つの言語を習得していることになるので、非常に大変そうである。

ちなみに、蝶衣は映画の最後に自殺しているが、彼が演じていた虞美人も自殺しており、蝶衣を演じている香港俳優のレスリー・チャンもこの映画が作られたちょうど10年後に自殺してしまった。これは、何かの偶然であろうか。

6 参考文献

明治大学准教授 加藤徹 『京劇城』

<http://www.geocities.jp/cato1963/KGJ.html>

社会思想社(1964), 教養人の世界史〈下〉近代・現代, 現代教養文庫